

柿本人麻呂留京三首

―伊勢と留京を中心に―

伊勢の国に幸したまひし時に京に留まりし柿本人麻呂の作りし歌

嗚呼見の浦に 船乗りすらむ 乙女らが 玉裳の裾に 潮満つらむか (1・四〇)

釧つく 笠志の埼に 今日もかも 大宮人の 玉藻刈るらむ (四一)

潮騒に 伊良湖の島辺 漕ぐ船に 妹乗るらむか 荒き島廻を (四二)

一 はじめに

右の三首は、持統6年3月、伊賀・伊勢・志摩方面の天皇行幸時、宮都に留まった柿本人麻呂の作品である。

上野理は、宮廷歌人である人麻呂が都に留まり、天皇ではなく船旅や海浜での大宮人の姿を歌う本作品を「留守歌」(「留京三首における人麻呂の方法」『国文学研究』第75集 1981年10月)の倒立ととらえ、旅にある夫の無事を願う妻がつくる留守歌を倒錯させて男性の立場から旅中の妻を案ずる作品とする。高松寿夫氏もその流れを受け、「留守歌」の発生と消滅を論じる(「初期万葉の生成と羈旅―留守歌の発生・展開・消滅―『上代和歌史の研究』2007年3月 新典社)。一方、「伊勢」、「船乗り」、「玉藻刈り」等の言葉を手がかりに、伊勢神宮に関する祭祀儀礼の行程をたどる儀礼歌の側面を重視する立場もある(寺田英代「留京三首」『柿本人麻呂《全》』2000年6月 笠間書院所収)。留京三首の文芸性・儀礼性いずれも先行する諸論文に尽くされているといえるかもしれない。では、なぜこの行幸に人麻呂は供奉しなかったのか。なぜ留守歌を作成する必要があつたのか。本稿では、この二つの疑問に関する考察を行う。

二 持統天皇の行幸

曾田 友紀子

持統天皇は、その治世の間頻繁に行幸した。離宮であつた吉野への三二回は別として、紀伊、伊勢にそれぞれ一回、さらに畿内への度重なる行幸と畿外二回という数字は、吉野と新皇候補地以外に出向かなかつた天武と対照的である。

天武崩御後、中央集権化を推進し、その象徴として新皇造宮のため畿内の有力豪族を巡り、天皇の権威を直接示して忠誠を確実にするという目的が持統の行幸に存在したことは明らかであろう。当時の天皇と主要豪族との関係はいまだ天皇と絶対的な中心を臣下が取り巻く形態ではなく天皇が直接各地に出向いてその威信により首長らに忠誠を誓わせる必要があつた。壬申の乱平定後、天武は政局を安定させて律令体制も着々と整備し、八色の姓により畿内有力豪族らの処遇もほぼ落ち着いたかに見える。だが、天武晩年においても不穏な政情がなくなっていなかったことは、13年には伊賀・伊勢・美濃・尾張の調役、14年7月に東山道美濃以東、東海道伊勢以東の諸国の課税を免していることから明らかである。これらは壬申の乱に関する恩賞としては時間が経過しすぎており、直木孝次郎(『持統天皇』1960年3月 吉川弘文館)は「はじめ先帝が指摘するように、軍事的な重要地にある人々への恩恵と解釈すべきであろう。乱の前後、変わらぬ人々の生活が厳しかったことを知っていた天武は、晩年特に何度も課税を免じる措置を発している。天武行幸がほとんどなかった事実、人々への負担を配慮した結果ともいえるだろう。近江朝は失われても、天武が安定した政権を確立したとはいえない状況が続いていたといえる。その天武亡き後、持統は二年以上にわたる殯宮儀礼によつて臣下に忠誠を誓わせ、大津皇子の刑を迅速に執行した。皇太子草壁の薨去、浄御原令の完成を経て即位した持統は、浄御原令に基づく官僚組織の整備とともに新皇造宮にも本格的に乗り出した。民衆の負担増大が政治的不安材料であることは明らかであつたが、名実ともに律令体制の完成を具現化するために、新皇京を建設して行政機関を集約させるとともに、

自ら指示した区域に諸豪族を定住させようとしていた。それこそ、淨御原令とともに完成させるべきもう一つの天武・持統両者のめざした中央集権的な国家のかたちであった。

先に記した持統治世下の度重なる行幸は、新京造宮に向け諸国に天皇として自らの存在を認めさせると同時に、行幸先の地域の税免除等によって経済的負担を軽減し、豪族はじめ民衆の不満を封じるといふ政治的戦略であった。仁藤敦史氏の言を借りるなら「動く大王から動かない大王」（『古代王権と都城』1988年2月 吉川弘文館）への移行期を、持統はまさに生きぬいた。

三 伊勢と天武・持統朝

天武・持統朝にとって伊勢が特別な地であったことは論を俟たない。壬申の乱の勝利は、吉野から東国に入った天武の軍勢に伊勢の豪族らに加勢したことが起点となった。伊勢神宮の祭神がアマテラスとなり、乱後は大和朝廷を代表する守護神となったことは周知の事実である。

天武は、推古朝以来途絶えていた伊勢への斎宮派遣を復活させ、大伯皇女を2年4月泊瀬宮にこもらせ、翌3年に出発させている。さらに翌年、十市皇女、阿閉皇女が派遣される。天武15年4月には天武の病平癒のため多紀皇女、山背姫王石川夫人が派遣された。天武亡き後、持統もまた夫と伊勢の地とが重なる歌を作っている。

天皇の崩りましし後の八年九月九日、奉為の御齋会の夜、夢のうちに習ひ賜ふ御歌一首
古歌集の中に出づ

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし わこ大君 高照らす 日
の御子 いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は 沖つ藻も 靡ける波に 潮気
のみ 香れる国に 味こり あやにともしき 高照らす 日の皇子（2・一六二）

全体の意味は不分明ながら、持統にとって天武と伊勢とは、夢の中でもともにあらわれる特別な関係にあったことが窺える。「高照らす 日の皇子」が繰り返される点も気になる。制作時期は持統7年9月内裏で行われた天武の法会とも、それとは異なる際であるともいわれている。一回性の儀礼歌ではなく、天武を偲ぶ折々に繰り返し歌われていたものが、御齋会の折りにも披露されたのかもしれない。亡き天武が今は神風の吹く伊勢の海に漂うよううたいぶりを、どう理解すればよいのだろうか。

四 伊勢行幸と留守官

日本書紀によれば、持統6年1月に「新益京の路を觀た天皇は、3月には伊勢行幸し、5月にその地鎮祭を行つている。その記載から、新京造宮と伊勢行幸との間に何らかの関連性があるとは考えられないだろうか。日本書紀に即して持統6年の主な天皇の行動を挙げると、

六年 一月 新益京の路を觀す。
葛城高宮に行幸。

二月 三月三日伊勢行幸を宣言、高市麻呂の諫言。

三月 伊勢行幸の留守官を指名、高市麻呂の諫言を聞かず、出發。
行幸先各地の調役を免除し、大赦を行い百姓に稻を与える。

四月 畿内四国の百姓の調役を免除する。恩赦を行う。

五月 伊勢行幸の際に立ち寄つた紀国の牟婁郡の人らに一〇年間の調役を免除。
吉野行幸。

新益京地鎮祭を命ず。伊勢・大倭・住吉・紀伊の四所の神に幣奉らす。

六月 新益京地視察。

七月 吉野行幸。

八月 明日香皇女田莊に行幸。

一〇月 吉野行幸。

と続き、伊勢行幸の前後に吉野行幸と有力豪族への加贈や加官、大規模な民衆への調役免除、恩赦が行われている。新京造宮に向けて人々の心を一つにし、天武の隠つた吉野、壬申の乱を勝利に導いた伊勢地方の象徴としての伊勢神宮を印象づけ、名実ともに乱後の天皇支配の絶対性を示すための示威運動の一環であったと考えられる。近年では「旧来の伊勢大神の社と天照大神宮の両者を合一した神社の造宮を企図する」伊勢行幸説（樋村寛之『伊勢神宮と古代王権』2012年3月 筑摩書房）もあるように、詳細は分らないが3月6日から20日までの伊賀、伊勢、志摩への行幸期間は長期にわたる。

その重要性は、3月3日時点で「留守官」として廣瀬王、富麗智徳、紀弓張らを任命したところにも認められよう。行幸時の留守官の記事は、斉明4年11月の紀伊行幸について古く、斉明朝の留守官蘇我赤兄の場合、有馬皇子の謀反との関係から特別な政治的意図によるとすると、この伊勢行幸にも何らかの意図があったとして不思議ではない。以後、行幸時の留守官設置は平城京遷都に伴う和銅3年までみられず、留守官の制度が整備されるのは天平年間に入ってからとされている（仁藤淳史「古代王権と行幸」『古代王権と祭儀』集思館編輯所収 1990年11月 吉川弘文館）ので、この留守官三名の任命は異例である。

廣瀬王は、天武時代から新しい宮地選定や兵器改めのために派遣され、川島皇子とともに国史編纂にも携わった王族であり、智徳、弓張ともに天武に誅を奉った高官である。高市麻呂の諫言を退けることへの配慮もあるかもしれないが、指名された留守官の重さは持統の伊勢への思いの重さを物語る。

五 行幸と留京

万葉集には、題詞に「行幸」を含む歌が一五〇首以上を数えるという（並木宏衛「万葉集巻一伊勢行幸時歌群―行幸時歌について―」『野州国文学』22号 1978年10月）。大部分が行幸に従駕した立場からの、いわゆる宮廷歌人とされる歌人による天皇賛歌であり、彼らが活躍した時期に行幸歌は集中している。並木氏は柿本人麻呂留京三首の題詞が巻一成立当初の段階からの資料に基づくとし、供奉しない「京留」の立場からの行幸歌が他にはみられない点から「公命による「京留」であったと思われる」と述べる。当該人麻呂作品を、当初は行幸先で作られたものが帰京後に宮廷で披露されたと想定する説も存在し、現実問題として題詞が当初の作歌事情に基づき決定的資料もない。

しかし、従駕の有無に関係なく、京に留まる男性の立場から伊勢に思いを馳せる体裁をとっていることが重要である。前述の紀の記事とあわせて虚心に題詞を理解するなら、人麻呂は「京」に留まる人々に向けて「伊勢」を想起させる歌を作成する公命を受けていたと考えたい。むしろ従駕せず、天皇行幸先である伊勢と留守官らの守護する宮都と同じ比重をもつことを明らかにする作品が人麻呂には求められていた。その治世下に一回の行幸地である伊勢は、浄御原宮と同

等に重要な地であることを印象づける歌が人麻呂の留京三首であった。

従来 本作品の内容が水や女性に関する何らかの儀礼をうたっているとの指摘はある。林田洋子氏は、あまをとめと玉藻刈りから神事、地名からは羈旅歌や行幸歌との関連等を指摘し、「水辺への行幸」として持統6年3月の伊勢行幸を位置づける（「水辺の遊び」『上代文学』32号 1973年4月）。民俗学的な視野に立つ示唆に富む論である。春という季節に女性たちが波荒い海に船出して藻刈りする何らかの神事を想定している点は、傾聴に値する。

その延長線上に導き出せる結論は、春に女性たちが船で行う神事をふまえ、藻刈りを擬した遊覧や船旅が歌の主題となり得るという事実であろう。女性が水辺で海草や植物を採取して神に捧げる儀礼から、持統の行幸をそれに擬して連想させるべく、人麻呂は都に留まる人々に天皇一行を想起させる歌を作ったのではないだろうか。伊勢行幸の政治的意味が人麻呂に伝えられていたか否かはわからない。伊勢行幸に際して人麻呂に留京歌の要請があり、それに基づく作品が作られた事実があるだけである。だが、巻一雑歌の人麻呂作歌の配列からは、少なくとも本作品成立の事情が推測できるように思う。

六 おわりに

万葉集巻一の藤原宮に御宇天皇の代の作品は、ほぼ制作時に従って、

持統御製歌（1・28）

・近江荒都歌（19・31）

高市古人近江旧都感傷歌（21・33）

紀伊国行幸時川島皇子作歌（22・34）

阿閉皇女作歌（23・35）

・吉野賛歌（26・38）

・伊勢行幸時留京三首（40・42）

当麻呂妻作歌（43）

石上麻呂作歌（44）

・阿騎野遊獵歌（45・49）

・藤原宮役民歌（50）

明日香宮より藤原宮に遷都後の志貴皇子作歌（51）

・藤原御井歌（51）

と続いている。「1」は人麻呂作歌、または通説では人麻呂作とされている歌である。また一字下げて掲げた歌は、成立年代を異にするとされるものである。

持統治世から近江京の荒廢、紀伊行幸に供奉した川島皇子、天武、持統にとって特別な地である人麻呂の吉野賛歌が並ぶ。そして留京歌の後には、軽皇子の成長と立太子宣言ともいえる阿騎野遊獵歌、さらには新京である藤原京賛美の長歌が続く。旧都の荒廢、畿外となる遠方の紀伊、天武朝の原点である吉野、深い紐帯関係にある伊勢への行幸、統治者の狩獵地であったとされる阿騎野における軽皇子の狩獵が歌われ、待望の新京である藤原宮を賛美する歌の間に京都の移転宣言のような歌が並んでいる。この配列を単なる偶然の産物としては受けとめがたいのである。

だが、留京二首成立時の状況を検討するだけですでに予定した紙幅を超過してしまった。素朴な疑問と題詞に関する私見を提示するに今はとどめ、作品の表現や様式の考察については稿を改めて論ずることにしたい。

Concerning “Ryūkyōsan’syu” maid by Kakinomotonohitomaro in Man’yōsyū

—— About “Ise” District and “The Mikado Zitō’s Official Trip”——

Yukiko SODA*

The Reason hasn’t been considered why Kakinomotonohitomaro didn’t go with Mikado Zito’s official trip to Ise district in 696. This paper resolves the question. The Mikado Zitō’s visit is concerned with her scheme that Ise district is a very special area for the Ten’mu and Zitō dynasty. So she made Hitomaro to stay the capital and ordered him to write a poet for court officers who didn’t accompany The Mikado Zitō.

キーワード：柿本人麻呂，持統天皇，伊勢行幸，留京三首，留守官

* 一般科教授

原稿受付 2016年5月20日